

## 「もののけ姫」の世界と里山の再生

「友の会」木村元廣

「人生70年も生きてると、いろんなことを経験させてくれるなあ…。それがコロナ禍の中で私が感じた思いです。若い頃、関東大震災は単なる歴史的イベントという印象しかありませんでした。ところが、阪神大震災、東日本大震災が起こり、「50年や100年に1度」と言われる集中豪雨や大台風などの自然災害も毎年のように訪れています。今年も九州などの各地域は「かつて経験したことがない大災害」に見舞われました。

地球温暖化に伴う気候変動の結果もたらされる大災害、そして新型コロナウイルスの感染爆発……。これらを生み出した根本的な要因は、どうやら「自然は人間によって支配しコントロールできる」という幻想を抱き、やみくもに経済発展を追求してきたことにあるのではないかと感じています。最近そんな気がしてきました。

何となく私は、宮崎駿監督のアニメ映画『もののけ姫』の世界と似通ったものを感じています。人間たちから「荒ぶる神々が支配する」と恐れられていた聖域の森林を、人の暮らす豊かな土地に変えようとして、人間と獣たちとの激しい戦いが繰り広げられる物語です。人間と獣や神々との死闘によって森林は死に絶えようとしていますが、やがてシシ神の奇跡の力によって蘇ります。「人間は許せない」というサン（もののけ姫）に対し、アシタカは「それでも共に生きよう」と語りかけます。

それでは「共に生きる」ために何が必要なのでしょう。私は「人間も自然の中の一部である」という当たり前の事実に戻ることが大切だと思います。先人たちは、自然の生態系を上手に活用し、動植物とも共存し合う仕組みをつくってきました。その一つの例が「里山」だと思います。それは人間が切り開き、人間も自然の生態系の一部に組み込まれた「人工的な自然」とも言えるでしょう。だから、人間がそこから離れると「荒れた自然」になり、人間生活と対立してしまいます。そうした荒れた里山を再生しようとする取り組みが、全国各地で広がっています。

その中に新たな社会経済システムを探るヒントがあるのではないかと…。そう思って、図書館にある『里山再生』（田中敦夫著 洋泉社）を借りて読んでみました。

### 1、アマゾンの原生林もボルネオのジャングルも里山？

「里山」と言っても明確な定義はありません。著者は「人が関与して改変された自然であること。人の取り分（収穫物）があるうえに、そのほかの生命にも生きる場を十分に与えていること。単に自然を破壊した跡地というだけでなく、原生自然でもない新しい生態系を築いていること。双方がかみ合って、結果的に人の営みと共存している2次的自然。これこそが『里山の自然』と言えるのではないだろうか」と述べています。

そして、2次的自然が里山であるなら、「アマゾンもボルネオも里山ではないか」と話が展開されます。アマゾンの原生林も、その3分の1から3分の2は人が意図的に作った

森林らしいのです。ブラジルのゲルジ博物館の長年の研究により、アマゾンに住む少数民族が、地域の天然林を自分たちが利用する木々を中心に植え、人工林に変えていたことがわかったそうです。

ボルネオでも現地の少数民族が古くから焼畑農耕を行っています。焼き払った跡に作物を育てるのは1年間だけ。翌年には別の森を刈り払い火を入れます。そのように広大な森が次々と焼畑として使用されていました。そのサイクルは8年から20年と長いので、ジャングルは再生されます。現在原生林のジャングルとなっている地域でも、実は再生を繰り返した「2次的自然」だと言えそうです。

熱帯雨林は、人間の手によるものだけでなく、落雷などによる山火事や洪水などによっても頻繁に破壊されます。その後新たな草木が生え、それらに適応した動物も現れ、新たな生態系が生まれます。そのような自然の攪乱によって生物の多様性が広がり豊かな生態系を形づくっていきます。実際に原生林では植物も動物も少なく、里山の方が圧倒的に多種多様な生物が存在しているそうです。

光がよく当たる場所にしか育たない草木も多数あります。それらを好む昆虫や鳥獣もたくさんいます。光の当たらない原生林の中で棲む草木や動物は限られますよね。だから、定期的に森が「破壊」されて、暗くなりかけている森が再び明るくなることで生態系が豊かになるということです。そう考えると、人間の営みは自然に悪影響ばかり与えているのではなく、多くの生物にとってプラスになる面もあるんだと、少し安心しました。

日本で農耕が始まったのは弥生時代よりも以前、縄文時代初期からではないかと言われています。そして、農耕は自然を改変し、やがて原生林と都市の間に、人が手を加えつつ育てた豊かな里山の自然を生み出しました。私たち日本人の多くが「心地よい自然」と感じているのは、そのような「里山的な自然」ではないでしょうか。

## 2、「開発」と「放棄」から生じる里山の危機

しかし、その里山が今や危機に瀕しているのです。その一つが「開発」です。雑木林などに覆われた身近な山を切り崩し、池を埋め、草地を掘り返して、そこに住宅地や工場用地を造成する…。里山の自然や景観がまるごと破壊されます。

もう一つは「人の手が入らない」ことから生じる危機です。筆者は「雑木林は、最初のうちこそ背丈も高くないし、落葉樹が多いので、冬は葉がなくなるために林床によく光が入って草も良く生える。だから虫も多いし、鳥や獣もたくさん棲める」が、里山を放棄するとやがて落葉樹の灌木も倒れ、雑木林は照葉樹の多い自然林となって草木も生えなくなる、ときには竹林になることもあるそうです。もちろん、雑木林に棲息していた昆虫や鳥獣も姿を見せなくなります。

そう言えば、岸和田でもあちこちで竹林を見かけます。それも「自然」だと思っていたが、モウソウチクの竹林はやっかいだそうです。モウソウチクは、日本古来の竹ではなく、江戸時代に中国からもたらされたらしい。太いタケノコが採れるうえに建築材にもなります。昔は農家が近隣に植えて管理していたが、タケノコも建築材も輸入ものが増えると管理されなくなる。その強力な地下茎、早い成長力が樹木や草の生育を抑え、竹林がどんどん広がったという訳です。移入種と言え、モウソウチクだけでなく様々な動植物がありますね。それらが在来種を駆逐するのも「里山の危機」の一つです。

著者は「里山の『開発』を憂えるのはいい。しかし『放棄』によって変質していく里山の面積は「開発」の比ではない」と訴え、「人が手を加えないことが自然保護、という考え方があがるが、それで保たれる自然はごく一部である」と述べています。

### 3、里山の再生を求めて～大切なのは里山のシステム

筆者は「里山とはシステムである」と言っています。つまり、人間も里山システムの一部であると考えた上で、動植物だけでなく、地質や地形、気候といった自然の要素、人の数や質、暮らしの文化、知恵などを含めて一体的に捉えることが大切だということ。「人間が暮らすための活動が里山の生態系の中で一定の役割を果たし、結果的に自然をも豊かにすることが肝心なのだ。システムの外から関与する『里山保全活動』では、一時的な保全にはなっても持続するのは非常に難しい」と述べています。

それは、手を入れずには維持できない雑木林の面積が、あまりにも広大だからです。筆者は、「里山保全の労働力として都市住民に期待することはできない」と率直に述べると同時に、しかし、「彼らの支持と助力なしには里山の保全、ひいては里山システムの構築は、今後不可能だろう」と、「里山保全」のボランティアの人たちの活動の意義や役割を高く評価し、全国各地の取組みを紹介しています。

また最後の方では、レジャーやリゾート、環境教育、医療的分野など「そこそこ儲ける」自律的な経済システムの必要性についても触れています。そのような施策によって自然環境や景観が変わり、今までの里山と違ったものになる可能性もあります。しかし、筆者は「それでもいいのではないか」と語りかけます。「里山とは人と自然が織りなすシステムである。それが機能して、新しい生態系が生み出されて豊かな自然が誕生し、それに人々の生活も組み込まれて楽しく過ごせるのなら、過去のシステムが失われることを恐れることはないと思う。…新しい里山をつくる挑戦を続けていきたい」と…。

### 4、「目からウロコ」の里山資本主義

NHK広島取材班と藻谷浩介(もたにこうすけ)氏の共同著作である『里山資本主義』(角川新書)には、岡山県真庭市・広島県庄原市・島根県邑南(おうなん)町・山口県周防大島など、中国地方における「里山再生」の取組みが紹介されています。

「里山資本主義」という言葉は、現代の世界経済を支配している「マネー資本主義」の対極を示した造語です。この本を読むとまさに「目からウロコ」。私たちが思い込まされていた「経済の常識」が次々に覆されていきます。その一例を紹介しましょう。

岡山県真庭市は、山林の面積が8割を占める典型的な山村地域。市内には大小合わせて30ほどの製材業者があります。その中で最大の製材業者が、何と発電事業を行っているのです。そのエネルギー源は、製材の過程で出る木くずです。これを産業廃棄物として処理すると、年間2億4000万円かかる。電力会社から電気を買っていないので1億円が浮く。余剰電力の売上が年間5000万円。総計約4億円も得をしていることとなります。この発電設備の建設には10億円かかりましたが、数年で減価償却も終え、発電導入から14年たった今も現役で稼働しているとのことでした。

それだけではありません。木くずは発電だけでは使い切れないので、それを木質ペレットに加工し、燃料用に販売しているのです。真庭市内では、一般家庭の暖房や農業用ハウスのボイラー燃料として、急速に広がっています。行政もそれを積極的に支援し、地元の小学校

や役場、温水プールなどに次々とペレットボイラーを導入。2011年に新庁舎に生まれ変わった真庭市役所では、ペレットを暖房用だけでなく冷房にも使っているそうです。さらに個人宅用ストーブや農業用ボイラーを買う場合には補助金も出しています。

## 5、『もののけ姫』の世界に立ち返って考える

この本で紹介されている地域こそが『もののけ姫』の舞台だったのです。日本では古来より近代前期に至るまで「たたら製鉄」という手法で鉄を生産。その中心地が中国地方の山間地域であり、日本刀や高品質の農具などを作っていたらしい。今でも島根県の出雲安来地方では、実際に「たたら」によって製鉄が行われ、日本刀など刃金を製造すると共に、安来市にある日立金属の工場では、ヤスキハガネとよばれる世界最高品質の製鉄を行い、その製品は海外の有名剃刀（かみそり）メーカーでも使われているそうです。

『もののけ姫』では、女性たちが数人がかりでふいごを踏んでいたシーンが印象的でしたね。その「たたら民」と呼ばれる人々が、山の神々と戦いを繰り返していました。たたら製鉄では多量の木炭を燃料として用います。そのため、多くの山林の樹が伐採され、はげ山同然になった山もあったそうです。サン(もののけ姫)が「人間は許せない」と言った気持ちも充分理解できます。

しかし、近世以降は森林の育成や管理を行うシステムも整備され、江戸時代後期から明治・大正期にかけて、出雲南部地域全域が「たたら里山」と言えるようになったそうです。太古から戦後間もない頃まで、山から得た資源を徹底的に活用する知恵を絞り、地域の経済を成立させていたのです。アシタカは、サン(もののけ姫)に向かって「それでも共に生きよう」語りかけました。その「共に生きる道」を見出していたのかもしれませんが。

それを破壊したのが、1960年前後の時期から急速に進んだ「石油を中心としたエネルギー転換」と「木材の輸入自由化」でした。日本では、戦後に造成された人工林の多くが放置され、育ちすぎた樹木が活用されないまま放置されています。中国山地の里山も、九州や北海道の炭鉱町と同様、中東産の石油に負けた「産炭地」だったのです。その結果、林業も製材業も衰退の一途をたどり、急速に過疎化が進行しました。

これらを振り返ると、近年の気候変動に伴う集中豪雨や新型コロナウイルスの感染爆発などは、自然界に君臨する「シン神」の嘆きや怒り、そして警告のように思えてきます。

もちろん、中国山間地域は見離されていた訳ではありません。地域活性化策として、中国縦貫自動車道・山陽自動車道などの高速道路が整備され、岡山空港・広島空港も海沿いから山の中へと移転。交通アクセスを改善し工場誘致も行われました。しかし、それらによって地域の経済は発展せず、さらに過疎化・高齢化が進みました。

「その里山で、木を資源として再評価する里山資本主義の小さな“のろし”が上がり始めている」ことに、筆者の藻谷浩介氏は「だから、格別の感慨がある」と述べています。

藻谷氏は「人が生きていくのに必要なのは、お金だろうか。それとも水と食料と燃料だろうか」と問いかけています。日本は四季に恵まれ豊かな森林があり、四方を海に囲まれた国です。多様で豊富な食べものに恵まれ、「再生エネルギー源」として水力も風力も太陽光も地熱も、そして木材も豊富に得られます。その国が、なぜ食料もエネルギーも自給できず、外国に依存し続けているのでしょうか。もう一度考え直してみたいですね。

発行 2020.8.7.